

33 カ国リレー通信

<第 18 回ブラジル>

アマゾン河口の街 ベレンより

中村 隆至

ブラジルってどんな国？

日本に行くときよくこの質問を受けるが、日本の 23 倍の国土を持つこの国には先住民のインディオ、ヨーロッパ・アジア・中東からの移民、アフリカから奴隷として連れて来られた黒人の人種と文化の混血・融合が地域毎に異なる割合・スピードで進み、それぞれに異なる特徴を持つ多様性を持った国であり、一言でブラジルを言い表すのは困難である。筆者はカーニバルで有名な 2016 年オリンピックの開催都市リオデジャネイロで 9 年間、アマゾン河口のベレンで 16 年間の駐在を経験する機会に恵まれた。両都市はポルトガル植民地時代にはその影響を強く受けたブラジル要衝の港町という共通点を持つ一方、経済発展では大きな差が生じているが、この 2 つの港町の異なる素晴らしさを経験することが出来たのは人生の幸運であった。

アマゾンアルミニウムプロジェクト

アマゾンアルミ・プロジェクトは、ブラジルのアマゾン地域に豊富に存在するボーキサイトおよびアマゾンの水系の水力資源を利用した電力を利用して、アルミナ精製とアルミニウム製錬の一貫工場を建設、操業する日本ブラジルの経済協力プロジェクトである。

日本にとっては石油ショックによる電力価格高騰により、壊滅した国内アルミニウム製錬工場に替るアルミニウム一次地金の安定供

給源の確保、ブラジルにとっては輸入に依存していたアルミニウムの自給体制確立、国際収支改善および南北社会格差解消のための北部地域の工業開発という意義を持つ。

アルミニウム製錬のアルブラスは、1981 年第 1 フェーズ着工、1991 年第 2 フェーズ完成、所要資金約 14 億ドルを投じて年産 46 万トンの設備がフル操業中となっている。生産されたアルミニウム地金は日本側の出資比率に相当する 49%が日本へ輸出されており、これは本邦アルミニウム一次地金輸入量の 10%強に相当する。

ブラジルとの出会い

中学・高校時代にサッカーのクラブ活動に明け暮れた筆者は 1970 年のメキシコワールドカップで ペレ、トスタン、ジャイルジーニョ、リベリーノ、ジェルソン等を擁し優勝したブラジルの芸術のサッカーに魅せられ、上智大学ポルトガル語学科に挑戦し、一浪を経て入学。一浪中に全く偶然にも義兄がサンパウロ勤務となり、姉もブラジルへ渡る。就職活動の際にブラジルで働ける会社を希望し、アルブラスの日本側幹事会社であった三井アルミニウム工業に入社。その後、アマゾンアルミ・プロジェクトに対する、日本側投融資窓口の日本アマゾンアルミニウム株式会社 (NAAC) に転籍し、同社より、アルブラスに計 3 回派遣され、今年でブラジル通算勤務

期間は 25 年を超える。筆者および家族（約 13 年間ブラジル滞在）にとってブラジルはまさに第二の母国である。

ベレンの街とナザレ祭り

大河アマゾンの南岸に位置する港町でポルトガル調のタイル建築の旧市街とマンゴー並木の街並みが美しいパラ州の州都ベレンには四季はなく、雨季と乾季しかない。雨季のスクール時には低地帯の道路は川となり、交通は一時的にマヒする。人口は 2010 年の調査では都市で 1.4 百万人、都市圏まで含めると 2.0 百万人といわれる大都市である。また、日本人・日系人合わせて約 30,000 人が住む（推定）。

1616 年にポルトガル軍指揮官カステロ・ブランコ将軍に植民化されたベレンが、繁栄したのは 19 世紀中頃から 20 世紀初めにかけてのアマゾン地域の天然ゴムのブームの時代である。当時の栄華の名残を残す建築物としてオペラ劇場、ナザレ大聖堂がある。

ベレンで一番有名な行事は 10 月の第 2 日曜日にセー教会から、ナザレ大聖堂まで聖母マリア像を山車に載せ、信者が綱を引いて行進するキリスト教の宗教行事であるナザレ大祭であり、約 3 百万人の信者・観光客が集まる。大河アマゾンの流れは緩やかであるが、ベレンの変化は早い、筆者が初めてベレン勤務となった 1989 年と現在を比べて大きく変わったのは次の点である。

- ・ 中層ビルディングの数が飛躍的に増加し、ジャングル側からの遠景の眺めはミニ・マンハッタンのようなものである、また居住区域がどんどん外側に発展している。
- ・ 空港が新空港となり、当時はなかったショッピングセンター、コンベンションセンター、港のレストラン街等が新名所となった。

- ・ 米系ファーストフード店の進出：マクドナルド、ピザハット等
- ・ 一世の方が中心だった日系社会が、新世代への過渡期となっていること・日系進出企業からの派遣者の減少にともない長女・次女がお世話になった日本人学校がなくなったこと。



バルカレーナ/ビラ・ドス・カバーノス

筆者が勤務するアルブラスのバルカレーナ工場はベレンから直線距離で 40km しか離れていないが、2002 年に橋が完成するまでは船あるいはフェリーボートしか交通手段はなく、陸の孤島であった。現在では橋と州道が建設され陸路が開通しているがベレン市内からは大回りとなり、車でも 2 時間近くかかること、また道路のメンテナンスも良くないこと、強盗と遭遇する可能性があることから筆者はフェリーボートをなるべく使用している。

工場から 7km 離れた未開発地のジャングルに社員用居住タウンとしてビラ・ドス・カバーノスというタウンサイトを建設した。州の開発公社が宅地を開発し、アルブラスが社宅、学校、病院、クラブ、スーパーマーケット等を建設した。操業 26 年を経過し、現在ではアルブラス社員の約 70% 近くがこのタウンサイトおよびその近郊に居住しており、人口は約 2 万人に達している。操業開始当時は

当地では新鮮な生鮮食料品は全く入手出来ず、ベレンから取り寄せていたが、現在はパラ州最大のスーパーマーケットチェーンのYAMADA（日系）が進出し、商店街も段々整って来た。



アルブラス工場（アルブラス部長会議。中央奥が筆者）

工場ではブラジル人の社長と毎日意見交換しながら、2人3脚で会社の運営に当たっている。ブラジル企業では事務のIT化がかなり進んでおり、社内のほとんどの承認プロセスや連絡は基本的にすべてシステムを通じて行われるが、矢張りお互いに相手の顔を見ながら意見交換することが大事であり、同僚や部下とも出来るだけ相手の顔を見ながらコミュニケーションを取るように心掛けている。また、オペレーターや外注社員の方々にも敬意をもって接し、ボン・ジア（お早う）、アテ・アマニアー（また明日）、何かしてもらった時のオブリガード（ありがとう）の一言を心掛けている。

誕生日

日本では恋人達を除くと誕生日は子供と老人位しかお祝いをしないが、ブラジルでは何歳になっても派手に誕生日を祝う。これは一年間無事に暮らし、歳を重ねることが出来たことを家族、友人および同僚等と祝うもので、

アルブラスでも会社からの誕生祝のレターがマネージャー経由本人に渡され、皆で Happy Birthday を歌う。筆者も郷に入れば郷に従えということで、良い歳をして恥ずかしいとは思いつつ、誕生日には普段お世話になっている方々を手巻き寿司パーティーに招待するのが恒例となっている。

筆者はパラ川に面したカリピ河岸にあるホテルで单身生活を送っているが、日本人派遣者が一人でこの地で暮らして行く上での問題は言葉、食事と週末の過ごし方であろう。筆者の場合、言葉はブラジル人のピアダ（ジョーク）やテレビの連続ドラマもほぼ理解出来るので問題はない。食事に関してはタウンサイトには都市部のようなレベルの高いレストランは無いし、いわんや日本のデパ地下のような何でも揃うような惣菜コーナーもない。幸運だったのはブラジル料理・パラ料理が口に合う上に、会社クラブのレストランの運営を日系人家族に委託しているお蔭で、すし・刺身・てんぷら・カレー・オムライス等の日本料理も食べることが出来ることである。このレストランは社員および地域住民の憩いの場所となっており、ブラジル人が器用に箸を使いながら刺身や天ぷらを食べたりしているが、最近のブラジル人向けヒットメニューはサーモンとクリームチーズの手巻き寿司とホット・サーモン（鮭の太巻きの天ぷら）である。また、ホテルでは簡単な自炊も出来るようになっており、忙しい時やレストランの休日には会社が日本から送付してくれる日本のレトルト食品やフリーズド・ドライ食品にお世話になっており、日本の食品メーカーの技術力に高さに驚いている。

さて、週末の過ごし方であるが、基本的なパターンは会社のクラブで早朝にテニス仲間とともにテニスで汗を流す。最近は釣りにも興味を持つようになった。



(釣り。左から 2 人目が筆者)

その後、スーパーで一週間分の買い物や誕生日のプレゼントを購入する。何も娯楽がない所なので昼は毎週誰かの家かカリピ河岸に集まってブラジル風バーベキューのシュラスコ、アマゾンの泥蟹の塩茹で、ナマズの寄席鍋等を食べ、お腹が一杯になるとハンモックで昼寝をしながら過ごすが、パラーの人々のホスピタリティーおよび懐の深さには全く頭が下がる。また、食事の時には日本でも最近ダイエットや抗酸化食品として流行っているアマゾン原産のアサイー（アサイー椰子）を食べる、地元の人々はこの実の絞り汁にファリーニャ（マンジオッカ芋から製造する澱粉の粉）を混ぜ、食事と一緒に食べるのが通の食べ方である。

2014 年サッカーワールドカップ

ブラジルでは 2014 年のサッカーワールドカップ、16 年のリオデジャネイロオリンピックの 2 大行事が予定されている。サッカーワールドカップに関しては残念なのは地元北部ブラジルからはマナウスが開催地として選ばれ、ベレンは落選してしまった点である。最近世界サッカー連盟より、施設建設工事の遅れが心配され、それに対してブラジルが反論するという事態が発生した。現時点での工事の遅れも、突貫工事の連続で何とか間に合わ

せ、大会が終わった時にはこれまでのワールドカップで一番良い大会だったと自慢するブラジル人の表情が目に見えらる。

但し、これもブラジルが優勝することが条件だ。過去の大会ではいつも優勝候補の筆頭であったブラジルも才能豊かな代表選手が若くしてヨーロッパに移籍するため、ブラジルスタイルのサッカーらしさが薄れる一方、世界中のサッカーのグローバルイゼーション化が進んだ結果、各国のプレースタイルが均一化し、ブラジルも過去のような絶対的強さがなくなり、単なる強豪国の一つに成ってしまった。言い換えれば、14 年は自国開催とはいえないということである。ブラジルの試合のある日には仕事は午前中で終わり、家族友人が集合する。ブラジルが得点すると爆竹が鳴り響き、紙吹雪が舞い散り、どんちゃん騒ぎとなるが、もし、ブラジルが大会途中で負けることになれば、翌日から、自国で大会が開催中であることもきっと忘れられ、何もなかったように普通の生活に戻り、仕事に励むであろう。14 年には、出来ることならブラジルと日本のワールドカップ決勝を生で見たいものだ。

(なかむら たかし ALBRAS -Aluminio Brasileiro S.A. 副社長)

参考文献：日本アマゾンアルミニウムホームページ <http://www.amazon-aluminium.jp/>
写真：大藏公治氏提供